

同志社の基礎、精神

奨励	横井 和彦〔よこい・かずひこ〕
奨励者紹介	同志社大学キリスト教文化センター所長 同志社大学経済学部教授 〔研究テーマ〕中国の「国進民退」と都市「単位」の変容

あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。

（ローマの信徒への手紙 12章2節）

同志社スピリット・ウィーク・良心探究ウィーク

ご紹介いただきました、キリスト教文化センター所長、経済学部の横井和彦と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、本日のチャペル・アワーは、「同志社スピリット・ウィーク」の一環として行われています。この「同志社スピリット・ウィーク」は、同志社大学のキリスト教主義教育や創立者・新島襄について触れ、同志社人としてのアイデンティティを高めることを目的として、2003年から始まりました。チラシにありますように、期間中には、講演や展示などさまざまな企画を行っています。これを機会に、ぜひ同志社を学び、知ってください。また、本年度からは、学校法人同志社の各学校における「良心探究ウィーク」の一環にもなっています。この「良心探究ウィーク」は、キリスト教主義に基づいた同志社の良心教育にあらためて思いを致し、全同志社人が、良心を手腕に運用する人物たらんとする同志社教育の原点に立ち返り、明日からの生活に向けて自らを省みる機会です。皆さんがそれぞれの立場で隣人に何ができるのかなど、良心を探究するウィークとして設けられました。これからのお話が、その一助となれば幸いです。

新島襄の教育宗教論

この4月にキリスト教文化センター所長を拝命して以来、創立者・新島襄の言葉に接する機会が増えました。たとえば、大学構内の掲示板に新島の言葉の墨書が掲示されているのですが、職務の一環として、その墨書の言葉を選定したり、あるいは、その言葉の選定のための候補をあげたりしています。皆さんご覧になったことがあるでしょうか。また、『プレジデント』というビジネス雑誌がありますが、同志社大学はその誌上に隔月で「新島襄からのメッセージ」という広告を掲載していて、そのメッセージの選定と解説も担当しています。そこで本日は、こうした中でとりあげた新島の言葉をいくつか紹介するとともに、その背景についてお話しすることで、先ほど述べました「同志社スピリット・ウィーク」、あるいは「良心探究ウィーク」の目的を果たしたいと思います。

最初にご紹介したい新島の言葉は、「教育の方法（ほうほう）は実用に立つ人間を養成す、以謂（いわゆる）芸術が入用なり。然（しか）し重（おも）なるものを占むるは人物が本（もと）になる」（同志社編『新島襄 教育宗教論集』岩波書店 2010年 120頁）です。

新島は教育について語る際に、しばしば、「人材（才）」ではなく「人物」を育てる、と語っています。「人材」と言うと、人を役に立つかどうかだけで判断するイメージが強くあります。けれども「人物」と言うと、人の内面的特性を問うているように感じます。新島はこれに続けて言っています。「好（よ）き人物になりて芸能があればその人の働きが広く国家へ働き多くなる。（中略）人物がよからずして芸能にすすむも世に書を為（な）す多し」（同 122頁）と。学問や技術を習得したり、使うことは、その人の内面的特性によっては、国や社会にとって有益にもなり、また有害にもなると言っているのです。それでは、新島はどんな内面的特性を期待しているのでしょうか。

そこへとつながる橋渡しの言葉として、次に、「さらばとて欧米の学術を講究すれば智識は開達すべしと思ひ、従来古聖人の道徳を廃棄して、西洋文明の中心なる道徳を捨て、その皮相なる学術のみを取りてこれを学べば、現今日本教育の結果を得るに至るべし」（同274頁）という言葉をご紹介いたします。新島は、いわゆる書物派知識人、すなわち欧米の書物の翻訳に終始した人々の啓蒙活動とは異なる文明紹介・日本批判を展開しました。新島はこう続けています。「洋学者流も近來は錢（ぜに）取り仕事を最上の学問とし、人を誑（あざむ）きても錢さえ取れば最上の学問と云ひ、智識が発達したと云ひ、己（おのれ）の品行等を破り恥を恥とせざるの徒、往々世間にあれば、これ等の教育学問は人の志操をして卑賤下等に向かしめ」。つまり、表面的な知識の吸収だけでは、かえって不幸をもたらすとさえ言っているのです。欧米文明の根底にあるものを発見していたからこそこの批判と言えるでしょう。それでは、その欧米文明の根底にあるものとは何でしょうか。

さあ、いよいよ新島の教育観の真骨頂と言えるのが、次の言葉です。「抑（そもそ）も教育は、宗教と密接の関係ある者にして、教育の基本は宗教にあり、と謂（い）うべし」（同 108頁）。近年、大学教育において「リベラル・アーツ」が注目されています。一般的には、古代ギリシャ・ローマで「人を自由にする学問」として生まれ、言葉にかかわる「文法学」「修辞学」「論理学」の三つと、数学にかかわる「算数」「幾何」「天文」「音楽」の四つの「自由七科」を指すとされています。日本では「教養」と訳されることも多いのですが、実は、正確には、人間が神様から授かった二つのテキスト、すなわち「聖書」と「自然・宇宙」を学ぶための学問が「リベラル・アーツ」なのです。前者三つは神様の御言葉である「聖書」を、後者四つは神様の被造物である「自然・宇宙」を学ぶための学問なのです。つまり、欧米の大学教育の基本には宗教、すなわちキリスト教があるということなのです。ちなみに、新島が学んだアーモスト大学は、皆さんご存知のとおり、全米屈指のリベラル・アーツ・カレッジです。そして新島は、はっきり言っています。「教育と宗教の関係、実（じ）になる所より然（しか）らしむ。而（しこう）してわが同志社教育は、実にキリスト教と密接の関係ある者にして」（同 109頁）と。

実はこの言葉は、同志社礼拝堂の定礎式における式辞の一部です。そこで新島は次のようにも言っています。「欧米文明諸国、いずれの著名なる学校にも、礼拝堂の設けなきはあらず。且（かつ）、最も美麗を尽くし、十分善良に作りあるを見る也（なり）」（同 108頁）と。そしてこれに続けて、「この礼拝堂は、わが同志社の基礎となり、また、精神となる者なればなり」（同 109頁）と力説しているのです。今日のメッセージの題はこの言葉からとったのですが、礼拝堂こそが、大学の象徴であり、同志社を大学たらしめているとさえ言えるのです。しかし現実はどうでしょうか。新島は続けます。「西洋諸国の学校に於（お）いては、已（すで）に宗教の教育に欠くべからざる関係あるを知り、これを貴重すと雖（いえど）も、我が日本は未（いま）だ然（しか）らず。基督（キリスト）教を賤（いや）しむるは、学生の常にして、わが同志社にも亦（また）、この教えを嫌う者なかりしにもあらず。然るに今日、この堂を神に捧ぐる事を得るは、真に進歩を顕（あらわ）す者と謂（い）うべし。又、今日の時勢を見る時は、この堂は是（これ）、実にわが日本に大なる関係を有する者なり、と信ずるなり」と。「今日の時勢」とはもちろん、当時、すなわち、1885年12月18日のことですが、けれども、今日只今と全く変わっていないと思うのは私だけでしょうか。

同志社大学のキリスト教主義

毎年、学習支援・教育開発センターが「キャンパスライフに関するアンケート調査」を行っています。先日、2015年度の中間報告書が出ましたが、ここでは2014年度の報告書の結果からキリスト教に対する学生の意識を見てみます。同志社科目を履修している1年次生が80%近くいる一方で、大学に対する要望として、「単位習得・履修登録の方法」や「施設・設備・大学で利用できる制度」について教えてほしいと回答した割合がそれぞれ40%程度でした。それに対して、「建学の精神や理念」については8%であり、逆に、教えてほしくないとの回答が13%もありました。また、3年次生に対する「3年間学んで得た能力感」への回答では、キリスト教精神が、「身につかなかった」が24・5%、「あまり身につかなかった」が32・9%という状況であり、当センターの力不足を痛感しています。

また、学生に影響を与える専任教職員の意識についても聞いてみました。当センターの取り組みの参考とさせていただくために、「同志社大学のキリスト教主義教育に関するアンケート」を、今年5月末から6月下旬に初めて実施し、約300人から回答を得ました。「同志社大学のキリスト教主義教育が教職員にどれくらい理解されていると思いますか？」との問いへの回答は、「十分理解・ある程度理解」が47・3%、「ほとんど・あまり理解されていない」が52・7%とほぼ同じでした。自由記述を見てみると、「同志社の精神、歴史などについて語る教職員が激減したことも、学生がキリスト教主義教育についての理解が乏しくなっている一因かもしれない」「キリスト教主義とは何かについて学ぶことができる研修や資料があってもよいと思う」といったご意見のほか、中には、「同志社大学に就職した理由がキリスト教とは無関係であり、キリスト教自体に興味がない」といったご意見も見られました。また、7月11日にキリスト教主義に対する理解促進のための研修会を行いました。が、「強制はいけないうえ、もっとキリスト教主義について触れ、学ぶ機会を増やしていくことが重要である」というご意見を複数の方々からいただきました。

130年前に新島が礼拝堂の定礎にたとえて、同志社教育を、そして真の教育・学問を、「真に進歩を顕す者」「実にわが日本に大なる関係を有する者」と期待したにもかかわらず、いまだ同志社の「基礎」「精神」、さらには日本の教育・学問の根底は固まっていないのでしょうか。先に述べたような同志社大学の実態からも、また「反知性的」とも言える国立大学の人文社会科学や教員養成の学部・大学院の統廃合等から見ると、固まっていないどころか、むしろこれまで築かれてきたものが着々と変えられようとしているようにさえ思え、つい悲観的になってしまいます。

しかし諦めるわけにはいきません。このような世の中の動きに倣ってはならないと思います。みなさんも「同志社スピリット・ウィーク」あるいは「良心探究ウィーク」を契機に、もう一度、大学、そして同志社大学で学ぶべきこと、その意義について考えてみましょう。最後に新島の次の言葉を覚えながら祈りたいと思います。

「諸君よもし理論をもって是非を判別せんと欲せば、決して難しきにあらざるなり。しかれども諸君よ、願わくばその理論に愛の油を注ぎ、もってこれを考えよ」（森中章光編『片隣集』『新島襄集』7 丁子屋書店 1950年 237頁）

ご在天の主なる神様

私たちは、同志社大学のキリスト教主義教育や創立者・新島襄について触れ、同志社人としてのアイデンティティを高めることを目的とした「同志社スピリット・ウィーク」あるいは、キリスト教主義に基づいた同志社の良心教育にあらためて思いを致し、全同志社人が、良心を手腕に運用する人物たらしめる同志社教育の原点に立ち返り、明日からの生活に向けて自らを省みる機会である「良心探究ウィーク」を覚えて、御前に集いました。

どうかあなたの御名によって新島襄をとおして建てられた同志社大学に恵みをくだし、教える者と学ぶ者を祝福してともに知識を深め、主の真理を悟り、謙遜な心をもって唯一の神を仰ぐことができるようにしてください。

この祈りを私たちの主イエス・キリストの御名によって御前におささげいたします。

アーメン

※引用しました出典の一部につきまして、読みやすくするため平仮名、現代仮名遣いにて表示しております。

2016年11月1日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録